Quantum Speed Limit for Quantum Natural Gradient Descent

かしゃるふぁ

2020年11月26日

1 Quantum Speed Limit

ターゲットの量子系に付随したHilbert空間を \mathcal{H} で表し、その密度演算子全体のなすRiemann多様体を $\mathcal{S} \coloneqq \mathcal{D}(\mathcal{H})$ とする。このとき \mathcal{S} の計量テンソルをgとする(詳細は[1]を参照)。さらに \mathcal{S} の部分多様体 \mathcal{M} を考える。 \mathcal{M} に含まれる密度演算子は、パラメータ $\mathbf{\theta} \in \Theta \subset \mathbb{R}^m$ を用いて $\rho(\mathbf{\theta})$ と表されるとする。

以下では、パラメータ θ が時間 $t \in [0,\tau]$ に依存している場合を考える: $t \in [0,\tau] \to \theta(t)$ 。 このとき $\rho_t \coloneqq \rho(\theta(t))$ がMでなす曲線を γ と書く。 つまり $\gamma \coloneqq \{\rho_t : t \in [0,\tau]\}$ である。以下では ρ_t はたついて滑らかであるとする。 2つの量子状態 ρ_0 と ρ_τ の間の計量テンソルをgによる測地線距離を $\mathcal{D}(\rho_0,\rho_\tau)$ として、曲線 γ に沿った長さを $\mathcal{L}(\gamma)$ とする。 $\mathcal{L}(\gamma)$ は、

$$\mathcal{L}(\gamma) := \int_0^\tau dt \sqrt{\sum_{\mu,\nu} g_{\mu\nu}(\boldsymbol{\theta}_t) \frac{d\theta_\mu}{dt} \frac{d\theta_\nu}{dt}}$$
 (1)

で定義されている。このとき測地線距離の定義から

$$\mathcal{D}(\rho_0, \rho_\tau) \le \mathcal{L}(\gamma) \tag{2}$$

が成立している[1]。この不等式を量子速度限界(quantum speed limit)と呼ぶ。

2 Quantum Natural Gradient Descent

Riemann多様体 \mathcal{M} 上の滑かな関数 \mathcal{F} についての最適化問題を考える。この最適化問題を解く手法の1つ がQuantum Natural Gradient Descent [2]である。このノートでは簡単にするために、パラメータの更新を 微小にしたQuantum Natural Gradient Descentを考える。つまりQuantum Natural Gradient Descentにお けるパラメータ $\boldsymbol{\theta}$ の変化は、前節の設定と同様の滑らかな曲線となる。これを前節と同じ記号 γ で表す。連続 時間でのQuantum Natural Gradient Descentにおけるパラメータの変化則は

$$g(\boldsymbol{\theta})\frac{d\boldsymbol{\theta}}{dt} = -\nabla \mathcal{F}(\boldsymbol{\theta}) \tag{3}$$

で与えられる。これは成分で表すと、

$$\sum_{\nu} g_{\mu\nu}(\boldsymbol{\theta}) \frac{d\theta_{\nu}}{dt} = -\partial_{\mu} \mathcal{F}(\boldsymbol{\theta}) \tag{4}$$

となる。この更新式を用いると $\mathcal{L}(\gamma)$ は

$$\mathcal{L}(\gamma) = \int_0^\tau dt \sqrt{\sum_{\mu,\nu} g^{\mu\nu}(\partial_\mu \mathcal{L})(\partial_\nu \mathcal{L})}$$
 (5)

となる。ここで $g^{\mu\nu}$ はgの逆行列 g^{-1} の (μ,ν) 成分である。この式と量子速度限界(2)を組み合わせると

$$\mathcal{D}(\rho_0, \rho_\tau) \le \int_0^\tau dt \sqrt{\sum_{\mu,\nu} g^{\mu\nu}(\partial_\mu \mathcal{L})(\partial_\nu \mathcal{L})}$$
 (6)

が得られる。 (6)式がQuantum Natural Gradient Descentに対して成り立つ量子速度限界であり、本ノートのメインの結果である。

残りの課題は、 $q \geq \mathcal{L}$ について具体的な形を代入して、(6)式から意味のある結果を得ることである。

2.1 ユニタリダイナミクスの場合

具体的なケースとして $\rho(\boldsymbol{\theta}) = U_{\boldsymbol{\theta}} \rho U_{\boldsymbol{\theta}}^{\dagger}$ とユニタリ行列 $U_{\boldsymbol{\theta}}$ を用いて表されている場合を考える。ここで $U_{\boldsymbol{\theta}}$ は生成子 \boldsymbol{X} を使って $U_{\boldsymbol{\theta}} = e^{-i\boldsymbol{\theta}\cdot\boldsymbol{X}}$ と表せるとする。すると $iU_{\boldsymbol{\theta}}^{\dagger}\partial_{\mu}U_{\boldsymbol{\theta}} = X_{\mu}$ が成り立つ。

2.1.1 Quantum Fisher information metricの場合

計量テンソルgがquantum Fisher information metricの場合を考えよう。このとき

$$g_{\mu\nu}(\boldsymbol{\theta}) = \frac{1}{2} \sum_{i,l} \frac{(p_j - p_l)^2}{p_j + p_l} \langle j | \Delta X_{\mu} | l \rangle \langle l | \Delta X_{\nu} | j \rangle \tag{7}$$

が成り立つ[1]。 ここで $ho(m{ heta}) = \sum_{i} p_{j} |j\rangle \, \langle j|$ と展開した。 また $\Delta X_{\mu} \coloneqq X_{\mu} - \mathrm{tr}(X_{\mu}
ho(m{ heta}))$ である。

参考文献

- [1] Diego Paiva Pires et al., Generalized Geometric Quantum Speed Limits, Phys. Rev. X 6, 021031 (2016).
- [2] James Stokes et al., Quantum natural gradient, Quantum 4, 269 (2020).